Letter From Hakusyu

白州だより

白州郷牧場からの冬のおたよりをお届けします！　http://www.hakusyu.jp/　info@hakusyu.jp

2010 年 1 月 20 日
二十四節気　大寒

発　行　　白州郷牧場
山梨県北社市白州町横手 2259
TEL : 0551-35-4520
FAX : 0551-35-2970

フィリピン、ネグロス島「カネシゲファーム」のカラバオ（水牛）

ネグロスのことなど

2010.1 椎名 盛男

昨年の 12 月 18 日から 22 日まで、フィリピン、ネグロス島に行ってきた。私がネグロスに初めて行ったのは 1995 年のように記憶している。国際産直のバナナに病気が出ていて、故人となった兼重さんから視察要請を受けたためであった。

昨日、旅立つ前の晩、成田のホテルで和郷園の伊東さんと飲み過ぎ、ひどい二日酔いに襲われ、成田―マニラ―ネグロス間は、ほとんど眠っていた。約 12 時間の旅だった。ヨーロッパの果てまでいける時間である。

バコロドの新空港に着く。一変していた。バコロド市内に向かう途中も、市内に入ってからも、私はただただ驚いていた。何もかもが変わっていた。街はたくさんの車であふれ、人々は活気に満ちていた。閉塞している日本に比べあまりに対照的であった。国際的なコールセンターもあり、大きなショッピングモールもあり、こぎれいなレストランも多くあった。韓国から英語留学と関係者が 2000 人くらい来ているという。彼らはレストランを連れてやってくるという。私はなんとなく韓国人気質がわかる気がした。ホテルにチェックインした。部屋は清潔でお湯もきちんと出る。それから大橋さん夫婦と四人で食事に出る。

大橋成子さんからいろいろ話を聞いたが、私には幻聴を聞いているように感じられ、理解に戸惑っていた。「巨大な社会がネグロスに舞い降りた。そして、ネグロスをがっちり捉え、システム化しようとしている」と感じていた。巨大な巨大なクモがスルスルと降りてきてネグロスと人々を食い散らかすのではという不安の鐘が鳴っている気がした。

振り返ってみれば日本にも巨大な社会はやって来た。60 年後半の若者の反乱（世界的）が、流行病のように消えた時、その巨大な社会がやってきた筈だ。私たちはまだガキで、それがなんだかわからなかった。だが、今はわかる。

ネグロスというよりフィリピンに、巨大な社会がいつまでも地面を濡らし続ける秋雨のように降り続いているのだ、と。雨降りオジさんは、それが幸福だといい、人々は真実の服を現象という服に着替え、

「豊かになった」という。そして、パン食い競争のような（物とり、物買い競争）人生へとシステム化される。日本がそうだった。

私には、フィリピン料理というのがいまだわからない。軽く食事をとり、早めに休むことにした。私たちは日本の冬の服装のままだったが、現地の温度（約 30℃）を体感できないでいた。秋山君は風邪をひいており二人とも馬鹿でろくでもない体を持ち歩いていた夜だった。馬鹿でろくでもない月の馬鹿でろくでもない日だった。

ホテルに戻り、冷房を切り村上春樹の「レキシントンの幽霊」を読んで、早めに眠る。

カネシゲファームの豚舎と苗舎

兼重氏の墓

朝、目覚めると暑かった。身体はネグロスを感じとりはじめた。シャワーを浴び、コーヒーとパンで、どこでどうつくったかわからないハムとソーセージを食べて、兼重ファームに４人で向かう。２時間くらいのドライブだが、どこまでも砂糖キビ畑が広がり連なり、コファンコ（『フィリピンを乗っ取った男』という本があります）の巨大なマンゴー畑が展開していた。巨大な社会が消え、昔ながらの小さな村々を通って、ファームに到着した。

そこは廃墟になっていた。「つわものどもの夢のあと」と誰かが言っていたと成子さんが言った。私はこれは何かの証だと思った。廃墟は、いるとするなら「神の刻印」のように見えた。チータ（女性）が出迎えてくれた。彼女は白州に来たことがある。そして、兼重さんの墓守をしている。

「今日、椎名さんが来る、と兼重さんに話しておいた」と言われた。

兼重さんの墓に行く。墓は小さなメモリアルパークになっていて、美しく整えられていた。私が河野さんと植えたマホガニーの木は大木になっていた。一陣の風が吹きわたり、木々がざわめいた。兼重さんがいるな、と感じた。彼の時間が止まり、骨になり―死んでから関係者の逸脱がはじまり、バラバラに遠くまで行ってしまい、逸脱は円環の輪として、閉じられてはいない。私は、いくつかの報告と誓いをし、墓参りを終えた。

廃墟は、カンラオン山のふもとにある。時はゆっくりと刻まれ、心地よい風が吹き渡る場所にある。白州に来たことのあるビボットさんに会う。15 年の歳月は風貌と体に刻みつけられていたが、ビボット氏であることはまちがいない。そして、カルロスさんを紹介される。野菜づくりができるひとらしい。

私をもっとも驚かせたのは、少年と青年の間のような子がそこで、共に働き、学びながら共同生活していたことだった。全部で５人いた。みんなと握手したが農民（農夫）の手だった。14 才の子も、もう農民の手をしていた。感動した。大学を卒業し、教員の資格をとるために農場で働き勉強している子もいた。彼らは、数年間ここで生活し、ヤギと豚二頭と５万ペソを得て故郷に帰っていくという。それを資産に、家を建てて妻を迎え、家庭がもてるのだそうだ。私は、彼らを勝手に「戦士さなぎ」と名付けた。成子さん、アンボさん（成子さんの夫）、チータ、ビボット、カルロスさんたちが、ネグロスの未来から糸をとりだし、マユをつむいでいる。その中に、戦士さなぎが眠っている。彼らの存在が農場の再建を告げてもいた。月曜日から金曜日まで農場に常駐しているアンボさんの住居をみた。私は遠く、ゲバラのボリビア時代を想像した。翌日もファームに行き、農場全体をマップに落とした。これで現地での仕事は終わった。あとは秋山君が日本で再建の設計図を書き、実務に落とすだけだ。

バイオガスプラント

カネシゲファーム ポントック式豚舎

次の日、エスペランサという所に行った。土地闘争で地主の私兵にひとりの若者が射殺されたと言う。犯人たちはまだ罰されてもいない。彼の墓は射殺された畑の中にあり、十字架がかかっていた。そこは電気も断たれていた。映画「俺たちに明日はない」のボニー＆クライドが負傷して立ち寄る大恐慌の難民キャンプのような場所であった。しかし、農場の名前はエスペランサ＝「希望」である。電気もない―エネルギーもない場で、良質の堆肥をつくっていた。できるまで 90 日かかるが、生物活性水があれば（ほんの少量）40 日でできてしまう。早く生物活性水が欲しいとリーダーが訴えた。「もう少し待って」というようなことを成子さんが言っているようだった。われわれや国連みたいな所や、知識人は安易に「世界」という言葉を使う。しかし、その世界にエスペランサのような所は入っているのか？入ってはいまい。世界とは OECD の総和のことだ。しかし、いまだに土地闘争で人が殺される。奴隷制や農奴を廃し、貴族の土地を農民に分配したのは、紀元前 340 年代の秦の宰相、商君である。弱小国、秦は蘇った。

バコロドに戻る途中、コファンコのマンゴー園の前を通っているとき、男の子３人がマンゴー園にクモを採りに行き―子供たちはクモを捕まえ争わせる遊びをするらしい―3 人とも射殺されたと話してくれた。バコロドには大きな社会が舞い降り、ちょっぴり民主主義が味付けされているかもしれない。しかし、農村部に行けば、そこは今なお紀元前の秦の前の時代のような、理不尽も不条理すら問われない。ただ、圧倒的な暴力の世界があるだけである。

日本に戻ると NHK のドラマ「坂の上の雲」がはじまった。ネグロス、ひいてはフィリピンに「坂の上の雲」はあるのかと思った。多分、あるまい。混沌が続いていくだけかもしれない。

近代国家と国民は、敵（仮想であれ）の発見と戦争を母胎に誕生する。当時の日本にとってそれは、登るべき坂であり、国家と文明は、坂の上にあるも

のだった。だから、司馬遼太郎は、維新から日露戦争までを「坂の上の雲」を目指した時代とした。国家の若々しい青春期を描き、それを善とした。

しかし、日露戦争を期に日本が善のプレートから悪のプレートへ移動したように歴史を区切る文学は成功していると私には思えない。日露戦争から40年後、日本は当然のごとく敗戦を迎える。40年の後半15年を彼は狂った時代と捉え、その時代へ手紙を書くように小説を書いてきた。私はそれは正しい行為と思う。私の勝手な憶測であるが、晩年、彼は「坂の上の雲」を成功した物語ではなかったと思っていたのではないか。なぜなら、79年のソ連の介入により、我々はアフガンを少しはわかるようになったし、当時の海の帝国が英国で、陸の帝国がロシアであり、両者はグレートゲームを展開していた。海の帝国にとって、ロシアの南下は阻止すべきものであった。グレートゲームの舞台が、アフガンと旧満州であった。維新の在り方そのものを問えば、日英同盟の実態が見えてきて、決して「坂の上の雲」とはならないと思うからである。そこには明らかに闇がある。

また、内村鑑三の「デンマルク国の話」という本が明治44年にでている。彼はそこで、対外侵略としての植民地ではなく、内なる植民地づくりの話をデンマークを例に語っている。つまり、デンマークのように木を植えようとと。司馬さんが、彼の言説を知らなかった筈がない。

日本人が国家と運命共同体のような国民という観念を手にしたのは、日露ではなく、朝鮮をめぐる清国との戦争を通してであっただろう。司馬さんは、そのことを書いていない。「国民誕生」の物語を。日本人がその時手に入れた「国民」はひどい誤りであったのだ。それからの日本と日本人は、ろくでもない国のろくでもない国民のろくでもない日本人になった。私たちの父や祖父のような時代、ネグロスに日本軍がいたのかどうかとても気になる。歴史を横系列にみるなら、敗戦後世代は、前の戦争と無関係といえるかもしれない。しかし、縦系でみるなら、あの戦争は今も生きているし、今日生まれた命にも生きている。明治維新の闇も、あの戦争の闇も、ひそかにこの国に息づいている。敗戦を経て、米軍の圧倒的武力（暴力）を背景に農地解放が行われた自作農が誕生した。エスペランサのような悲劇は起きなかった。そして、70年代前半の人から、みなマッカーサーの子となり、成長した。しかし、南太平洋に200万人を超える霊は回収されない―しなくても恥じない大人に成長しただけだった。日本の闇は何ひとつ解決していない。ネグロスから学んだことは、とても多く、深い意味がある気がする。

ネグロスで夜空を見上げると、満点の星であった。太古の時代、人々は自分と家族の運命を司る星々と星座をもっていた。権力は自らの正当性のために、人々の運命の星を奪い、そして、死してもなお墓（地底の闇）の天井に星座を描き、独占をやめなかった。ネグロスの夜空の星々は、まだ、奪いとられていないように見えた。だったら、エスペランサへの道は、開かれているにちがいない。

白州郷牧場の研修センターに完成したBMW活性水プラント

新プラント完成

このプラントは人間の雑排水をBMW技術で処理し、BMW生物活性水に変え、農地に還元する目的でつくられました。これまでの私たちの農法は、人間と大地の間を家畜が媒介する、有畜複合農法として実践されてきました。畜産は飼料の高騰で危機を迎えていますが、化学肥料も石油があと30～40年でなくなるという話を受けて、価格も2倍にはねあがりました。つられて有機の苗までも値上がり続けています。こういうことは、国がなんとかするべきで、ひとつの農家が試みることではないのかもしれません。しかし、ひとつの試みとしてBMW技術で、現代風に人間の廃棄物を生産と環境に役立つものとして使うことは、意義のあることだと考えています。また、こういう考え方と取り組みを各季節のきららの学校で子供たちに伝えていこうと考えています。

サンチュ

白州での女性の職場づくりのひとつとして取り組んだのが、サンチュでした。和郷園のさかき農場を見学した際、サンチュを観させてもらったのがきっかけでした。整理された、きれいなハウスで、通路のゴミを掃き出している担当がいたことも、農業の上で深く考えさせられました。それは3Kといわれる職場ではありませんでした。

厳寒の白州ですが、ハウスのサンチュは元気です！

地方の戦後とは、人口の流出の中、過疎に悩んだ歴史でした。それは、地域への利益誘導型の政治を生み、自治体は企業誘致を叫び続けました。しかし、ほとんど成功しませんでした。私たちは過疎になるのは企業がないからでなく、女がいなくなるからだと考えるようになりました。以来、女性たちが楽しく働ける、清潔で美しい環境の職場をつくることが課題となりました。

和郷園を見学し、指導を仰ぎ、取り組みだしてから6年になります。今は、通年（12ヶ月）通して栽培できる技術を身につけました。厳寒のなか、白州のサンチュは順調に生育しています。

白州郷牧場の本棚から

村上春樹について語るときに僕の語ること①

村上春樹の『1Q84』の続編、Book 3が今年の四月に刊行されるそうだ。ご存知の方も多いかと思うが、二〇〇九年の六月に刊行されてからBook 1、Book 2とあわせて２００万部を越える売上を記録して社会現象にまでなった。私もこれに便乗して、村上春樹の諸作品を読みはじめたのだが、どの作品もテンポよく読み進めることができて気分がよくなってくる。文体というのだろうか、言葉のリズムが体にスッと馴染んできて、だんだんと気分が高揚してくるから不思議だ。

しかし、どの作品を読み終えても、どこかスッキリとしない感覚にとらわれる。はて、この小説を一体どう受け止めたらよいのだろう？果たしてこれは何を伝えようとしているのだろう？村上春樹は何を考えているんだ？そんな諸々の疑問に首をかしげてしまう。とにかく一気呵成に読ませるのだが、内容が複雑かつ難解で何を意味しているのかよくわからないのだ。

しかし、この私にとって全く不可解な村上春樹について、連載という形式で何か書いてみようかと思う。主な理由は、村上春樹の作品を読んだことのない誰かにその面白さを説明するためである。とはいっても、これは単なるおせっかいのようなもので、私なんかが村上春樹についてあれこれと論じなくても、すでに多くの人々が村上春樹の作品に触れている。しかし、自分が面白いと思っているものが「どう面白いのかうまく説明できない」というのが何だか情けない。そこで、書いてみれば何かわかるかもしれない、という気持ちで書いてみようと思ったのだ。要するに、私が村上春樹を面白さわかるようになるために書き、その結果として何かをつかめたら、読者の方々ともそれを共有できる、ということである。だから論の筋は紆余曲折するだろうし、果たしてそれがどこに行き着くかは私にはわからない。もしかしたら尻切れトンボで終わってしまうかもしれない。それでもやってみよう、と思っている。

一応のテーマとしては、「村上春樹は物語をどうとらえているのか」ということである。私たちはありとあらゆる「物語」に囲まれている。幼少時代におとぎ話や絵本を読み聞かされ、大人になってからも映画、小説、漫画といった様々なメディアを通して物語を摂取する。文学であれ、SFであれ、ラブストーリーであれ、何歳になっても「物語」そのものへの興味関心が尽きることはない。本や映画といったメディアのまだない、遠い昔の時代でも、人々は口伝えによって数多くの「物語」を聞き、そして語り継いできた。

人は「物語」を求める。私たちは「物語」から興奮や感激だけではなく、時に人生の指針や現実世界を行きぬくための教訓といったものを受け取る。「～せよ」、「～しなければならない」といった、硬直した文言でしめされる規範やルールも、生き生きと描写された仮想上の登場人物や出来事に仮託されたとき、より強い説得力をもちうる。極論かもしれないが、私たち一人ひとりの行動やふるまいのほとんどは、過去に見聞きした「物語」を参考にして決められている、と私は思っている。

なぜ村上春樹は作家となり、またそうであり続けているのだろうか？村上春樹もまた、普通の人々と同じようにありとあらゆる「物語」の摂取を通して人格形成を果たしてきたに違いない。村上春樹は数多くの海外小説を翻訳している。そのほとんどは、彼が若い頃に読んで強烈な印象を受けた作品だ。当たり前の話だが、彼は作家（「物語」の差出人）である以前に読者(「物語」の受取人)だった。おそらく、村上春樹は自身の読書体験から、「物語」がもちうる力のようなものを普通の人々より深く確信したに違いない。だからこそ、小説家という「物語」を書くことを専門にする職業を選び、また小説家としては異例なほど多くの翻訳を手がけているのではないだろうか。そして、彼が抱いている「物語」への信頼と、その深みを垣間見ることさえできれば、彼がつくりだす小説世界が少しはわかるに違いない、と私は考えている。

ここまでが前書きのようなもので、次回から村上春樹の著作を一つずつとりあげていきたい。次回は小説ではなく、『翻訳夜話』という対談本をとりあげようと考えている。　**（牧場スタッフ：内藤 光）**